

満州育ち

沖繩県 小林 光子

一 生い立ち

私は昭和八（一九三三）年現在の北九州市の母の夷家で生まれた。そこは蒲鉾製造業で、大勢の使用人が働いていたが、母は叔父が満州の大石橋で和菓子屋を開店したので、手伝いに行った。そのとき見合結婚した相手が、父だった。

父、藤沢喜一郎は、神奈川県の大石橋の貧しい農家の出身だった。高等小学校を卒業したとき、村の医者が父を見込んで、医学校に進学させようとしたが、「長男だから養子にはやれない」と祖母が反対した。父は東京の品川区大井町にある鉄道教習所に学んだ。そのころ、関東大震災に遭った。卒業後は国府津機関区に配属され、徴兵検査後満州に派遣された。満期除隊後は満鉄に入社し、祖父が亡くなった後、家族を呼び寄せたのだっ

た。母と結婚したころは、大家族を養うために危険手当の出る奥地に勤務したこともあったそうだ。満鉄の幹線から支線を伸ばして、試運転を行うのである。我が家のアルバムには、日満の国旗を飾った機関車の写真がたくさんあった。運転技術に優れていて、内地から皇族などが来られたときの、御召列車の運転を任せられたこともあった。

母は三人目の子供の出産のため、内地の実家に帰った。生まれたのが私であったが、また女だったので、さぞかし父はがっかりしたことだろう。出産後の母は、私と二人の姉を連れて錦州の父のもとに戻った。私には生後二歳まで過ごした錦州の記憶は全く無い。敗戦後、多くの日本人がここを経由して葫蘆島から引き揚げたが、昭和八年ころの錦州には日本人の姿は少なく、満鉄の社宅も粗末なものだった。

私が物心ついたのは、父の転勤先の承德からであった。鉄道が敷かれてすぐだったので、駅は真新しく模した駅舎は黄色く堂々としており、そのユニークな姿

は七十数年を経た今も健在とのことである。駅前から、遠くの武烈川の堤防まで見渡すことができた。武烈川の川原には、はるばる内モンゴルからやって来たふたこぶラクダの隊商が野営していた。ラクダの世話をする蒙古服姿の商人や、唐三彩の置物のようなラクダの表情を思い出すことができる。

駅近くの満鉄住宅は、赤レンガの二戸建てで三部屋あった。庭には父が作ったぶらんこや鉄棒があった。レンガを積んで、五メートルほどのプールも作ってくれた。母は、近くの満人社宅の張さん一家と親しかった。

老太太（おばあさん）が、よちよちと纏足の足をラオタイタイ

動かして運んでくれる餃子の味は、格別だった。纏足は良家の子女の風習で、十センチメートルほどの小さな足は、子供時代から足指を縛りつけて大きくならないようにしていたとのことである。

承德は北京の北方、万里の長城を越えた先にあり、清代の皇帝は夏の間、ここの避暑山荘（離宮）で政務を執ったと言われている。奇岩明峰に囲まれた盆地で、

広大な名園や外八廟と言われるラマ教寺院は、現在は世界遺産になっている。

武烈川の長い橋を渡ると市街地で、日本人の小学校は丘の中腹にあり、裏手には松林に囲まれた墓地があった。

三年生のときの担任は沖繩出身で、旅順師範学校を卒業されたばかりの松本忠雄先生で、厳しかったが熱心な先生だった。私が後年教師になったのも、松本先生の影響が大きかった。いじめられた私に先生は何も言わず、先生のお手伝いだけを命じられて、満足して校門を出たことを覚えている。先生が出征される前に松林で撮った記念写真には、いじめっ子もいじめられっ子も写っていて、懐かしい。先生は戦場からも無事に帰られて、再会したのは私たちが五十歳になったときだった。新聞で承德小学校の同窓会を知り、連絡して下さったのだった。戦後二度と教職には戻らず自衛官の道を進まれ、函館の隊長を最後に退官し、接骨院を開業された。

再会したころ、教頭をしていた私は、武方稔校長が

旅順師範出身であることを思い出して連絡した。「お
おっ！ 松本が生きていたか！」と驚き、「彼が柔道部
の主将で、自分が剣道部の主将だった」と懐かしそう
に語られた。旅順師範の卒業生には満人の学校に赴任
した人もおり、現地の要人になった教え子たちに今も
慕われているとのことだ。「志道」という同窓会誌を出
し、毎年中国から留学生を招く活動を続けていた。松
本先生もその後、同窓会の皆さんと旅順を訪問され
たのだった。

小学校四年まで過ごした承德の思い出は尽きない。
道端の糞ころがし、ラマ廟への遠足、離宮の池でのス
ケート、マーチョ（馬車）やヤンチョ（人力車）など、
懐かしいことばかりだ。国交回復後、私はよく承德を
訪れた。同窓会も、今は民族中学というエリート校に
なっている母校を訪問し、植樹をしたり要望されてい
た楽器を贈ったりした。満州国は傀儡国家だと言われ
るが、そこで育った私たちにとっては、満州は掛け替
えない故郷なのである。

二 逃避行

父の転勤に伴い五年生になった私は、無人の荒野に
忽然と姿を現したような、新開地の阜新の小学校に転
校した。撫順炭坑を上回る石炭を算出する炭坑地だっ
た。将来を踏まえ、大きな道路やロータリーのある都
市計画がなされていた。炭鉱で働く日本人の住宅は、
満鉄の赤レンガに比べて見栄えの良い洋館で、ペチカ
は無く、地下の配管から全戸に蒸気の送られる集中暖
房だった。

満鉄の住宅は西阜新駅の近くにあつて、市街地から
徒歩一時間ぐらいの所だった。商店などはなく、満鉄
の施設が完備されていた。生計所（食品・日用品雑貨
販売）、厚生会館（宿泊施設、映画演劇上映施設）、病
院などがあり、三千人近くの社員家族が住んでいた。
住宅は庭も広く、父はそこに冬野菜の貯蔵も兼ねた防
空壕を作り、井戸や鶏小屋も作った。家の中は承德の
住宅より広かったので、ペチカは二ヶ所にあつた。

門を出ると、道路向こうは運動場だった。冬になる
と、水を流してスケート場になった。私は、学校から
帰ると玄関でスケート靴に履き替えて、日が暮れるま

で滑ったものだ。「寒い北風吹いたとて おじけるよ
うな子供じゃないよ 満州育ちの私たち」「風の吹く
日は外に出て リンクを回ろよスケート遊び 満州育
ちの私たち」をよく歌った。日本人の子供は、国定教
科書のほかに満州補充読本という副読本を習っていて、
そこには満州の伝説や風習、各地の自然などが載って
いた。国定教科書にも「西は夕焼け赤い空 東は丸い
お月さまコウリヤン刈って広いなあ どっちを見ても
広いなあ」という詩があったが、この詩を習って満州
に憧れたと、後年職場の同僚から言われたことがある。
小学校へは駅から通学列車が出ており、発電所前で
降りてから阜新大橋を渡り、三十分ほど歩いて登校し
た。

昭和二十年当時、我が家には十五歳から生後三カ月
までの七人の子供がいた。私は、四月から阜新高等学
校に入学していた。父は機関区助役として語学力を買
われて、内地から来た新入社員や、満州社員の指導に
当たっていた。常日ごろから、「満州に骨を埋める」と
言い、満州国の建国理念である「王道樂土、五族協和」

を信じ、現地に溶け込もうと努力していた。休日にな
ると、よく私を連れて遠くの満人部落を訪れて、お茶
をよばれ世間話をし、発音を直してもらっていた。狗コウ

(犬)の発音を繰り返し練習していたのを覚えている。
八月十五日は満州の空も快晴だった。このとき、学
校には校長先生以外に男性はいなかった。ソ連軍侵攻
で、数日前に四十五歳以上の男性が根こそぎ動員され
ていたのである。「もう、私は皆さんを教育することが
できません」と、白髪の校長先生が沈痛な表情で話さ
れたことを覚えている。暑い日差しの中を、姉たちと
家に帰った。

玄関を開けると、待っていたかのように母が出て来
て「もうそんな袋下げなくて良いんだよ。日本は負け
たんだから」と明るく言った。袋とは非常用袋のこと
で、防空頭巾や包帯、三角巾など空襲に備えた用品が
入っていて、肩から下げて通学していたものだった。
アメリカの飛行機など、一度も見たことはなかったの
に。

数日後、妙なことがあった。大量の食糧が無料で配られたのだ。駅に停車し続けていた貨物列車には、ソ満国境に送られる日本軍の食糧が満載されていた。軍がいなくなり、放置されたままだった。そこで、満鉄は日本人社員に配給したのだ。米、乾パン、食用油を欲しいだけもらってよかった。我が家の奥の八畳間には、天井に届くほどそれらが積み上げられた。ドラム缶入りの食用油はバケツで運んだが、運びきれずに残った。通りがかった満人のスイカ売り呼び止め、スイカと交換した。こうした日本人の行動を、遠くから見ていた満人たちは何を思っていただろうか。

出張先からの父の電話で、母は愕然とした。各地で暴動が起きているというのだ。私たちは総出で畳を上げて、床下に食糧を隠し、大きなリュックサックを作った。出張先から帰った父は、休む間もなく冬服や着物類を箱に詰めて、知り合いの満人宅に運び、保管を頼んだ。父なりに今後の事態に備えたのだ。しかし、こうした個人の努力や才覚ではどうにもならない現実が、大きなうねりとなって押し寄せてくるのが、敗戦

ということなのだ。

九月三日早朝のことだった。我が家の九人家族は、前夜からリュックサック姿で、社宅中央の知人宅に避難していた。市内では、八月末から略奪が始まっていたからである。眠れない一夜を過ごしていた耳に、遠くでの雄叫びや破壊の音が響いた。音はだんだん近づいてきた。そして激しくなってきた。私たちは覚悟を決めて身仕度した。母は生後三カ月の妹を抱き、父は三歳の弟を背負い、その後ろを長姉と上の妹が手をつないで外に出た。私は次姉と共に下の妹の手を取って、三人でその後を追うようにして出た。外に出て驚いた。黒い服装をした炭鉱労働者が庭を踏み荒らし、狂ったように走り回っている。興奮して喚き合い、窓を叩き割っている。子供の泣き叫ぶ声や女性の悲鳴、男性の怒号。混乱の中、いつしか父母の姿を見失ってしまった。

「日本人は高粱畑の中に逃げろ！」という声が聞こえた。社宅の北方は、広い高粱畑だった。私たち三人は畑に飛び込むと、どンドン先に進んだ。遙か彼方に

は川があるはずで、そこまで逃げれば安全だろうと思つた。いつの間にか周りには人がいなくなり、遠くの破壊の音も聞こえなくなつた。立ち止まってみんなの来るのを待った。待てども待てども、だれも来ない。来ないはずだつた。あの後、すぐに「日本人は集まれ！」という声があり、子供や女性を真ん中に周りを男性が囲んで隊列を組み、みんなは西阜新駅に向かつたのである。そんなこととは露知らず、私たち三人は高梁畑の中でじつとしていた。

いつしか日が高くなり、空腹も感じ始めてきた。姉と相談して、市内に行くか反対方向の駅へ行くかと考えた。市内へ行けば、父母がすぐに見付からなくても、学校には先生のだれかがいると思つた。担任の理知的な美しい女の先生の顔を思い浮かべた。私たちは、思い切つてもと来た方向に引き返した。高梁畑から社宅前の道路に出たとき、とうとう満人たちに取り囲まれたが、その中には女性もいた。背中のリュックサックを奪い取られ、中を見られた。着替えや教科書、そして大事にしていた刺繍道具。私は思わずこれだけは駄

目とばかり、新品の刺繍セットをつかむと走り出した。配給されたばかりの、宝石のように美しいシルクの糸だつた。そのころの衣料品はスフ（人造繊維）ばかりで、タオルなどはすぐにすり切れてしまうのだった。純綿や純絹は貴重品だつた。中年の女が大声を上げて追い掛けて来て、奪い取られた。妹の小さなリュックサックだけは見逃してくれた。中には乾パンしか入っていなかったからだろう。

略奪されて身軽になつた私たちは、とぼとぼと市内を目指して歩いて行つた。反対方向の駅に、父母たちが待っているとも知らずに。私たちの姿を目ざとく見付けた別のグループが、またはや追い掛けて来た。私たちは走つた。高梁畑の続いている粟畑だつた。丈が低いので全身を隠すことはできないが、背をかがめてじつとしていた。妹の和子が小声で何か言っている。「姉ちゃん、姉ちゃん、それウンコよ」と言つたので見たら、肥料として掛けている人糞だつた。必死の面持ちで満人の方を伺っている姉は、大便の中に手をつけていることに気が付かない。私が突ついても見よう

としない。その春一年生になったばかりの和子は、このことをよく覚えていて、大人になってからもほかのことはほとんど記憶に無いのにと、不思議がるのだった。

やがて略奪者たちはそばまでやって来て、私たちを見下ろし、時計を出せと言った。その中に顔見知りの若い男がいるのに気が付いた。生計所の従業員で、日本語のうまい男だった。私たちの咎める目に「こうなったら仕方ないよ」と言うのだった。私たちが無一物だと分かった彼らは、立ち去り始めた。そのとき私は突然、友人のことを思い出した。姉に相談する暇は無い。「李春雨の家はどこか教えて!」と、日本語で繰り返し叫んだ。生計所の若い男が引き返して来て、畑の中をこっちに來いと手招きした。李春雨は私の朋友で、通学列車の中で知り合った満人の少年である。年のころ十三、四歳の背のすらりとした子で、お互いのノートを見せ合うことから話すようになった。私の満州語は、小学校三年から週一時間の授業で習ったものだ。彼の場合はどう習っているのか知らないが、日本語を

少し知っていた。名前を名乗り、ノートに書いてくれた。私は春雨は「はるきめ」だと書き、二人で笑った。
チユンユエ

李春雨の家は、満鉄の満人社宅の中にあつた。生計所の男は先に立って歩いて行く。周りには、おびただしい略奪品の山があつた。暴動を始めたのは炭鉱の労働者だったが、宝の山を前にして満人社員とその家族も、略奪に参加したのだ。李家もミシンや調度品、なかなか高額の商品を運び込んでいた。老太太が嬉しそうに整理していた。李少年はいなかったが、父親が間の悪そうな顔で、「日本人は駅に終結している」と言った。疲れ切つた私たちは、ぼんやりと家の中を見回し、虚脱状態で腰掛けていた。もう空腹感は無くなつていた。

やがて父親は、私たちを日本人の所に連れて行くと言つて、身なりを整えた。外へ出ると、もう太陽は傾いていた。日本人社宅を通り抜けるとき、我が家の前を通つた。玄関は開けっ放しで、中は暗くてよく見え

なかった。隣家の玄関前にはアルバムが投げ出され、おびただしいガラスの破片の中に写真が散乱していた。辺りは静かな夕方、もうあれだけの群衆の姿はなかった。

日本人は駅近くの青年寮に集結していた。投石除けに畳を外して窓に立て掛けており、中は真つ暗だった。男性たちが出入口を守っていた。奥から母が出て来た。泣きながら一部始終を話す私たちに、母もどんなに父が探し回ったかを話すのだった。「防空壕に隠れているのではないかと、心当たりの壕を開けて回り、大声で名前を叫び続けた。搜索に出掛けるたびに身ぐるみ剥がされるので、人々から服をもらってまた出掛けた」と。殴られて大怪我をした人もいたのに、身体だけは無事だったのは、現地語で事情を説明できたからだった。

駅を占領していたソ連軍との交渉の結果、治安の良い錦州へ避難することになった。しかし、市内には約一万五千人の日本人が取り残された。もし私が市内に行っていたとしたら、同じ運命を迎えたことだろう。

後年、生き残った同窓生から、その冬の凄惨な状況を知らされた。

飢えと寒さで亡くなったW先生の遺体は、土が凍って固いので深く埋葬できず、夜になると野犬の群れが掘り出した。ソ連兵が女を出せと押し掛けて来たとき、難民收容所の奥から出て来た若い女性が、ソ連兵たちの目の前で青酸カリを飲んで息絶えた。私たちの学校のT先生だった。同級生のYさんの父上は、家族を守ろうと両手を広げてソ連兵の前に立ちふさがったところ、その場で射殺された。阜新は残留孤児を多く出した所である。昭和五十六年出版の「阜新終戦記」によると、「阜新の防衛に当たっていた日本軍一千人は、八月十七日早朝、満鉄に列車を出させて、家族や家財もろとも安全地帯の錦州に移動したのだった。市公署(市役所)は避難計画を立てたが、満鉄関係者を入れて二万人近くの人々の住む所が無く、中止された」とある。

九月三日深夜、線路脇の倉庫に移動するよう指示が出た。大きな倉庫だった。暗闇の中、ソ連兵が懐中電灯を照らしながら若い女性を物色に来た。何か人の

争う声が聞こえ、私たちは怯えながらじっとしていた。ソ連が不法にも満州に攻め入ったのは八月九日だ。日ソ中立条約の有効期限内である。阜新に進駐して来た兵士は、日本人を守らなかつた。略奪を放置し、自分たちも先頭に立って金品を要求した。下級兵士による略奪暴行事件は頻発していた。我が家では、父の手で三人の娘の髪が切られていた。ソ連兵が玄関から入って来たたら、勝手口から隣家に逃げるようになっていた。後で読んだが、引揚船が港に着くと、妊娠可能な年齢の女性にはその有無が聞かれ、処置が施されたとある。戦争とはそういうことなのだ。

九月四日未明、駅のホームには長い列ができた。貨物列車に乗り込む前に、一人ひとりが荷物と体の検査をされた。めぼしい物は取り上げられた。妹の和子が列車に乗りとうとしたとき、背中のリュックサックをもちぎ取ろうとした兵隊がいた。まだ若い少年のような兵隊だった。あの高梁畑の逃避行のときさえも見逃してくれた、あのピンク色の小さなリュックサックだ。母は思わず兵隊の腕を押さえ、分かるはずもない日本語

で避難した。その剣幕にたじろいで、兵隊は手を離した。その手にはいくつもの時計がはめられていた。

三 引揚げ

貨物列車に乗ってからのことは、何も覚えていない。きつと、安心感と疲労からぐっすり眠ってしまったのだろう。南西百五十キロメートルほどの距離にある錦州には、その日のうちに着いた。満鉄の寮に入り、毛布や日用品の支給を受け、食堂で共同炊事の食事を頂いた。大きな浴場でゆっくり湯に浸かり、家族一緒に生きている実感を噛みしめた。寮には、既に各地からの避難民が入居していた。驚いたことに、三年前まで私が住んでいた承德からの人々がいた。ソ連の参戦を知り、八月十日には避難を開始したという。わずかながら荷物も運んだようで、上等の石鹸を分けてくれた。私は支給された男性用の服を着て、丸坊主の頭で秋風の吹く街の中へ出た。父から、胸を張って男らしく大股で歩けと言われた。街角では市が立ち、道端で和服や図書を売る日本人もいた。父は、豆腐を作って売り歩いた。子供時代に貧しい暮らしの中で、農作業の

合間に豆腐を作って売る親の姿を見て育ったので、豆腐の作り方を知っていたのだ。街では警察官や軍人、中でも憲兵が隠れていないかと追求が進められていた。知り合いの娘さんは、独り身では危険だからと勧められて結婚したのだが、相手は元憲兵だった。結局は逮捕されて、以来行方不明になった。

やがて、父は再び鉄道に勤務し始めた。以前の満人部下が採用してくれたのだった。運転技術を買われたわけで、仕事は貨物列車の運転であった。ソ連軍が略奪した物資や、解体した工場設備を運ぶのだ。あの最新式発電所も、日本人に解体させ大連港から積み出したのである。「満州に残すなら、思い残すことはない。しかし、たった数日の参戦で火事場泥棒のように自分のものにするなんて！」と、嘆息する父だった。今でも怒りが込み上げてくるのは、六十万人もの日本軍人を強制連行して、極寒のシベリアで食糧もろくに与えず、過酷な労働をさせて多くの人々を死なせたことだ。戦争が終わったというのに。同窓生の父親は、民間人なのに軍人と共に連行され、帰らぬ人となった。

水道、電気などのライフライン保守のため、引き渡しまで残った結果である。数日の戦いで、五年も十年も強制労働させるとは、ローマ時代の奴隷と同じだ。

父が転職したことで、寮を出て一戸建ての社宅に引っ越した。事務職だった人が立ち退いた後で、タンスだけは置かれたままだった。久しぶりに家らしい家に住むことができて嬉しかったが、タンス以外に家財道具はなく、一つの布団に子供四人が寝る状態だった。

市内は中共軍が押さえていて、治安は安定していたが、やがて国民党軍が入って来た。遠くで交戦の銃声がしたが、市街戦などはなかった。国民党軍は宿舎が無いので、設備の良い日本人住宅を要求してきた。極寒の満州で野営するのは無理だったのだろう。同居でも良いと言うので、我が家には数名の兵隊が宿泊することになった。私たちは八畳一間で生活し、ほかの二間を提供した。

三十代の張隊長のほかは、十代か二十代の若い兵隊たちだった。全員が四川省の出身で、黒い布靴を履き、背中には竹製の雨傘を背負っていた。庭にかまどを築

き米飯を炊いていたが、日本米は粘りがあつてまずい
と言ひ、茹でこぼして粘りを捨て、また洗つてから炊
くのだった。おかずは毎日同じもので、白菜と豚肉と
春雨の炒め物一品だけだった。

ある日、どこからか日本の軍用犬のシェパードを連
れて来た。首に縄をかけ、いやがる犬を引きずつて来
た。私が日本語で命令するとおとなしくなり、何か訴
えるような目でじつとこちらを見るのだった。賢い犬
で耳がピンと立ち、縄につながれていても、凜として
姿勢が良かった。私は、何度もその犬をなでてやつた。
しかし数日して、彼らは犬を撃ち殺して食べてしまつ
た。豚肉の代わりにしたのだった。後に四川省を旅行
して知つたのだが、四川料理では犬の肉は珍重される
のだ。「狗肉」と書かれた看板をよく見掛けた。
彼らは素朴で親切だった。弟を抱いて歌を教えてい
た。「我是兵 你是民 我們都是一家人……(私は兵士、
あなたは人民、我らはみんな一族……)」と。隊長の
張さんは男前で、髪を七三に分け、身なりに気を付け
ていた。馬車に乗つて、京劇を見せに連れて行つてく

れた。夜は落花生や瓜子(カボチャの種)を買つて来
て、私たちと筆談を交えて会話を楽しむのだった。そ
のころ、吉川英治の「三国志」を読んでいた私たちは、
劉備や孔明と書いて話すのだが、兵隊たちは文字を知
らないようだった。私たちが得意になつて彼らの先祖
の蜀の国の歴史を語るのを、感心しながら聞いている
のだった。

父の給料は多くはなかったが、仕事帰りに雑囊いっ
ぱいの石炭を持ち帰ることができたのは、何よりだつ
た。零下三十度の冬は、ペチカが有り難い。二重窓の
機密性に富んだ社宅は暖かだった。避難民の中では、
開拓団の人々が悲惨だった。物乞いをしている母子を
見掛けた。鉄道局の敷地には、粗末な墓標が増えてい
った。子供を売買する話もあった。日本人の子供は頭
が良いので、高く売れるのだ。我が家にも、十五歳の
長姉を満人の嫁に売らないかという話があった。母は
怒つた。そういう斡旋をしている日本人がいたのだ。
これも、生きてゆく術だつたのだろう。

私は姉と共に働ぎに出た。最初は病院の看護士の手

伝いで、洗濯した後の乾いた包帯を巻いたり、道具を運んだりした。倉庫からマットレスを運んでいたとき、

びっしり虱しらみがついているのに気が付いた。驚いてマ

ットを落としそうになった。強力な殺虫剤の無かったそのころは、よく頭や衣服に虱が湧いたものだ。発疹チフスが流行していた。虱が媒介するからだだった。

次に見付けた仕事は、紡績工場東洋綿花の女工だった。豊田式自動紡織機とマークされた機械で、綿布を織った。糸が切れると自動的に機械が止まるので、はた結びで糸をつなぐ。うまくなると受け持つ機械が増え、三交替制の現場では、いつも人と機械が動いていた。空気は綿埃で汚れ、深夜の番が回ってくると、疲労と睡眠不足から居眠りが出るのだった。

工場の中に、黒い綿入れの満人服を着た少年の一群がいた。口もきかず、笑いもなく、青白い顔の痩せた日本人だった。満蒙開拓少年義勇軍の人々だった。国策として送り込まれた十五、六歳の少年たちである。ソ満国境に入植したが、軍人ではない彼らは置き去り

にされ、辛苦の末に脱出して、生き残った人々だった。

やがて、もっと儲かる仕事を長姉が見付けてきた。

手作りのいなり寿司とおはぎを売るのがだ。母と長姉が作り、次姉と私が売りに行った。平箱に入れ、駅弁売りのように肩から紐を掛けて街角で売るのが、安くて味が良いのでよく売れた。街角では、男の子たちもタバコ売りをしていた。「美国的好烟草売 好烟草売 好烟草売……（アメリカ高級タバコはいかがですか！ 高級タバコだよ……）」と、哀愁を帯びたメロディー調で売り歩いていた。美国とはアメリカのことで、タバコはラクダの絵のついたキャメルの偽物などだった。紙幣の中では満州国のもので以外は価値が無く、国民党軍の真新しいものは二束三文で、受け取ってはいけなかった。

年が明けて春がきて、私は十三歳になった。髪も伸ばし始めた。日本人は帰国できることになった。父は技術者だったので、残留を勧められた。日本は空襲で破壊され、住む所も食べ物も無いと言われた。故郷を捨てた父には、残留の方が良かったかもしれない。母

は残留には反対だった。自分の実家に帰ればいい、と言うのだ。結局、子供には日本の教育が必要ということ、で、残留を断った。

引揚げの注意がいろいろあって、現金は一人千円、荷物は自分が持つことができるだけ、宝石や金を隠し持っていたら、所属する団体の全員が帰国中止と言われた。もとより、我が家には隠し持つ財産など無い。

あの略奪の日の後、一度だけ父が阜新に行ったことがあった。父は、西阜新社宅のペチカの灰の中を探した。母が指輪や金時計を隠したのだ。灰の中には何もなかった。屋根は抜け、窓枠まで持ち去られ、写真で見るとポンペイの廃墟のようだったと父は言っていた。庭の畑には雑草が生い茂り、ゴボウだけはあった。ゴボウは、日本人だけが食べる野菜だからであった。

引揚げの日、錦州駅は人であふれ、満人学生が荷物検査をしていた。貴重品を見付けると、当然のように取り上げていた。やがて駅構内に入って来たのは、屋根の無い貨物列車だった。家族ごと固まって座った。列車はゆっくりと錦州駅を離れて行った。五月の陽光

がさんさんと降り注いでいた。みんな開放感にあふれ、大声で故郷の話をし、他愛のない冗談を言い合っていていた。我が家もピクニック気分、持参したものを食べた。食紅で染めた、燻製の鶏肉がおいしかったのを覚えている。その日のうちに葫蘆島に着き、丘の上の海が見える満鉄社宅で一泊した。

次の日の午後港へ行き、岸壁から小型の艦船に乗った。米軍の上陸用船艇だそうで、日本人の船員がきびきびと働いていた。日の丸の国旗がはためいていた。やがて船は岸壁を離れ、陸地から遠ざかって行った。もう夕方だった。太陽はぼんやりと赤かった。白い並しづきと夕靄に霞む港に向かって、みんなは手を振った。見送ってくれる人はだれもいなかった。空にカモメさえいなかった。私は、もう二度とここに戻ることはないだろうと思った。だれかが「ラバウル小唄」のメロディで「さらば満州よまた来るまでは　しばし別れの涙がにじむ……」と歌い始めると、みんなが唱和するのだった。万感の思いで、「馬鹿野郎！」と叫ぶ者もいた。だれもかれも泣いていた。陸地が見えなくな

るまで立っていた。

船には何日乗っていただろうか。島が見えるという声を聞き、甲板に出てみた。日本近海の島が、次から次に姿を見せていた。小さな島にも緑の樹木が生い茂り、カモメが飛び交い空も青かった。何と美しい国だろうと思った。山といえは禿げ山、冬は万目枯れ果てて荒涼とした大地を見慣れていた私は、これが祖国日本なのだと実感した。

昭和二十一年五月二十三日、博多港に上陸した。未の妹久子の初誕生日だった。動乱の中で多くの乳幼児が死んだが、久子は無事だった。博多の町は爆撃で破壊され、瓦礫の山だった。戦災孤児を見た。汚れた服から伸びた細い手足は垢だらけだった。それでも元気に飛び跳ねながら、「行け行け軍艦日本の 国の周り はみんな海……」と、学校で習った歌を歌っているのだった。

海岸近くの宿泊施設で数日を過ごし、援助物資などをもらった。ある日、母が憤慨しながら帰って来た。十五歳になる長姉と共に呼び出されたのだった。暴行

による妊娠の有無を調べる検査のため、長姉も対象者になったからである。すさまじい状況があったことは知っていた母だが、自分に対しては無礼なという思いだったのだろうし、ましてやまだ幼い娘にまで、そんな質問をするとは許せないと思ったのだ。

福岡県遠賀郡折尾町、これが私たちの帰る場所の名である。私が生まれた、母の実家がある町だ。博多から二時間足らずの列車の窓から、外を見た。うっそうと茂里山の姿に、びっくりした。妹たちは竹林に感激していた。「舌切り雀」の童話で、スズメのお宿の竹林を思い出したからだ。折尾の駅に着くと、母は勝手知った道を先頭に立って進んだ。ところが、家が無かった。線路沿いなので、強制疎開の対象となり、取り壊されたのだった。残骸の散乱した空き家で、リュックサック姿の一家は言葉を失い、呆然と立ち尽くすのみだった。

赤ん坊のむずかる声を聞きつけて、奥の方の小さな家から人が出て来た。祖母だった。「おお！ おお！」と母を抱くのだった。祖母は隠居所を建ててもらい、

当主の叔父一家は丘の方に借家を求めて引越して
た。

四 遠い道

私たちは、叔父の家の二階に厄介になった。家業の
蒲鉾製造業は統制経済のため休業し、叔父は勤め人にな
っていた。母の目算は、すっかり狂ってしまった。

母の考えでは、夫は国鉄に再就職し、自分は家業を手
伝って働く予定だった。しかし、国鉄の給料は安く、

満鉄とは違って社宅も無かった。引揚げ時に持ち帰っ
た一人千円は、すぐに底をついた。物価が、特に食糧
が高騰していた。それに、母はバカなことをしていた。

九人家族の我が家は、九千円持てるので羨ましがられ
ていた。そこで、つい裏の家の人に二千円ぐらいなら
と、金を預かってしまったのだ。自分の実家が、景気
良く商売しているはずだと自慢した結果だった。博多
に上陸した後、日本円に換金した二千円をその人に返
したのが、今更ながら惜しかった。

食べ盛りの子供たちはいつも空腹だった。道端や公
園で、食用になる野草を摘んだ。食糧の配給は遅配や

欠配が多く、米は減多に配給されなかった。小麦粉な
らまだ良い方で、大豆かすや高粱や芋粉などが主食と
して配給された。満州から運んでいる途中で、爆撃で
沈められた船から引き揚げた、水漬けの高梁が配給さ
れたことがある。腐敗臭がひどく、干して粉にしたが
食べるには無理だった。サツマイモの茎や葉はおいし
かったが、カボチャの茎や葉は舌触りが悪くまづかつ
た。電柱に、貼り紙で農家の手伝いを募集していた。

姉は一日十円、私は八円もらった。昼食時にカボチャ
の煮物を出してくれたが、中に入っている煮干しや種
がとてもおいしかった。私は、今でもカボチャの煮物
には種やわたを入れて煮ている。それを食べるのは私
だけが。

妹の久子は誕生日過ぎてても、いつまでも歩けなかつ
た。いざって動き回るので、脛は固くなって光ってい
た。手足は細く、腹部は異様に膨らんでいた。お腹が
痛いと毎晩泣いた。私は撫でさすってやり、祖母が毎
朝唱えていたお経の「ナンミョウホウレンゲキョウ」
を言いなさいと宥めるのだった。父が虫下し薬を飲ま

せたら、うどん状の回虫が大量に出た。そのころの野菜には、回虫の卵がついていた。便所から汲み上げた汚物を、肥料として使っていたからだ。やたらに蚊が多く、刺されて掻きむしると潰瘍になり、子供たちはできものだらけだった。

父の働き口がやっと決まった。それは折尾の近く、日炭高松炭鉱の坑内夫だった。住宅がもらえるからだった。炭鉱住宅は二階建て八軒長屋で、一階は台所の土間と六畳一間、二階は六畳一間だけだった。共同の水道と便所があり、風呂は炭住街の真ん中に共同風呂があった。

母は担ぎ屋をやった。農家からレンコンを買って、山のように背中に担ぎ、市場まで運んで来るのだ。運動会のころはよく売れるので、大八車を借りて運んだ。次姉に学校を休ませ、車の後押しをさせた。田圃の畦道でひと休みしたとき、姉が将来の夢を語り、進学したいと言った。母はそれを聞いて泣いた。何のために引き揚げて来たのだ。子供の教育のためではなかったかと。姉は女学校を卒業すると就職したが、給料を貯

めて上京した。住み込み女中をしながら、東京教育大（今の筑波大学）を卒業して教師になった。母に語った夢を実現した。

四十四歳の父には、過酷な坑内労働だった。冬でも高温の地下で、塩を舂めながら石炭を掘るのだ。地上に出たときは、粉塵で顔は真っ黒、目ばかりギョロギョロしていた。炭鉱は戦後復興のための重点産業なので、特別な配給があった。今も覚えているのは、米軍の野戦用口糧（レーション）が特配になったことだ。大ぶりの弁当箱ぐらいで、缶詰のハム、チョコレート、ビスケットなどがぎっちり詰められ、水を殺菌する錠剤まで入っていた。日本軍のそれが、乾パンにコンペイ糖が少し入った袋だったことを思い出し、あれでは勝てるはずはないとも思った。父の弟たちの家族も引き揚げて来たが、住む所が無くて父を頼ってきた。ハルピンの叔父家族五人と、済南の叔父家族五人だ。ハルピンからは徒歩で南下したのだった。寝たきりの祖母を叔父が背負い、叔母はその年生まれた長男を背負い、三歳の長女の手を引いての逃避行だった。叔母は、

胸にオムツの袋と洗面器をぶら下げて歩いた。洗面器は、老人と赤ん坊のオムツを洗うためのものだった。祖母は「置いて行って」と懇願したが、叔父は頑張り通した。

濟南の叔父たちは、満員列車での引揚げだった。途中で次男の容態が悪化し、死んだようになったので、列車が止まったとき降りて線路脇の溝に横たえ、草をかけて発車まぎわの列車に乗った。そのとき、次男が息を吹き返し泣き声を上げたので、叔母は飛び降りて抱きかかえて来たのだった。

一階の六畳間は叔父たちの家族でぎっしり、祖母は二階の六畳間に寝かせて、私たちはその横で介護がてら寝た。叔父が炭鉱に採用されて同じ長屋の一室に移るまでは、まるで難民収容所の再現のようだった。

私は、一年遅れで裏山の向こうの女学校に入學した。男のような髪をしてスカートで隠しているので（満州で丸坊主になったから）、ほかのクラスの人々も見物に来了。姉が作ってくれた薄いズボンを、冬になっても穿いていた。灯火管制の黒い遮蔽幕を、どこからかも

らって来て作ってくれたのだ。氷のような板張りの廊下を、裸足で歩いた。上履きも靴下も無かった。足が冷たいので、椅子の上に正座して授業を受けた。私は十カ月も学校に行かなかったので、勉強に熱中した。特に初めて習う英語は面白かった。発音が良いと褒められたのは、中国語の発音に似ていたからだ。

学制改革で、女学校は併置中学校となった。三年を卒業すると、男女共学になった福岡県立東筑高校に入った。折尾の高台にある、明治時代に創立された筑豊の伝統校だった。朴歯下駄を履き、弊衣破帽の生徒たちの中で、女子は少数派だった。二年上に小田剛一さん（俳優の高倉健）がいた。芦屋の米軍基地から、毎週英会話を教えに夫人たちが来てくれた。記念写真を撮ってくれたが、片隅にひとときわ背の高い健さんの少年期の顔があるのが目につく。

高松炭鉱の炭住街には引揚者がたくさんいた。その子弟で同じ高校に通学する仲間とは、境遇が同じで気が合った。優秀な彼らに、多くのことを学んだ。人間形成の大切な時期に、知的好奇心にあふれた彼らと知

り合えたことは、人生最大の幸運だった。長屋の隣の棟には、天津からの引揚者で九州大学医学部に合格した先輩がいた。仲間たちは、よくそこに集まった。文学、絵画、音楽そのほか、機知に富んだ会話で私はその基礎を知った。私はモーツァルトファンだが、そのころ彼らの一人から借りたレコードで、ピアノ協奏曲二十六番K五三七「戴冠式」を繰り返し聴いて以来である。あの第一楽章は、今もよく思い出す。折しもエリザベス女王が即位して、ラジオでもこの曲を聴いたものだ。ニュース映画で見た女王は、若く美しかった。

高校三年のとき、折尾駅の近くに「引揚者更生市場」ができた。母は、その中で食堂を開くことができた。私が休学して手伝うことになった。錦州では、いなり寿司がよく売れたが、今度はチャンポンがよく売れた。蒲鉾屋で育った母の味は確かだったのだ。

食堂を手伝っているときに、引揚者仲間の一人が知らせてくれたのは、文部省が「大学入学資格検定試験」を実施するということだった。これに合格すれば、同級生と一緒に大学を受験できるのだ。学校に相談に行

ったら、休学では受験資格が無いので、退学してはどうかと言われた。私なら、十分合格できるというのだ。仲間たちもそれを勧め、受験に必要な写真も撮ってくれた。私は退学し、第一回の大検合格者になった。

数十年後、私が校長になったとき、真っ先に激励の電報をくれたのは、その仲間の一人だった。彼は大手自動車会社の副社長になっていた。私のことを新聞で知ったという。あのころの彼は朝鮮からの引揚者で、引揚げの途中父親を亡くし、長兄のもとで暮らしていた。貧困の中で未来を夢見て、励まし合った連帯感始終変わらない。現在、彼らの夫人も交えての、年一回の海外旅行を楽しんでいる。

今年も暑い夏がやってきた。北京はオリンピックで沸いている。戦争を知らない若者たちが、熱戦を繰り広げているのを見ると、日中両国の関係は、遣唐使の昔から遙かな道を歩いてきたものだと感慨深い。戦後六十三年、私も遠い道を歩いてきた。「人の人生は重き荷を背負いて遠き道を往くがごとし」（徳川家康）のとおりだ。奈良女子大学に入学したとは言え、引揚

者の身が楽しい学生生活を送れるわけがない。アルバイトの仕事ももらいに、よく学生課に顔を出した。私が継ぎの当たった上衣を着ているのに同情した職員が、娘さんの古着を下さったことがある。育英会の奨学金と、大学の学費免除の奨学金、そしてアルバイトで生活した。今では死後となった「苦学生」だ。学生課の肝煎りで、苦学生仲間と「観光ガイドクラブ」を作った。講義の合間に観光地を案内するのだ。県のガイド試験を受けて、資格を取った。バス会社の奈良交通から連絡が入ると、修学旅行のバスに乗り込み、大仏殿や若草山を案内した。二時間で一日分のバイト料ももらった。

卒業してからの苦労は、引揚者でなくても、働き続ける女性には当たり前のことだ。四人の子供を育てながらの教職生活。完全にやるためには、起床はいつも午前三時だった。我が子の入学式にも卒業式にも行ってやれなかった。自分の勤務する学校と同じ日だから。

定年まで働くことができたのは、父母から受け継いだ丈夫な身体と、満州育ちの挫けない心があったれば

こそである。そして、夫をはじめ周囲の皆さんに支えられ、遠い道を歩き続けることができたのだ。退職後十五年、昨年からは夫婦で沖繩に移住し、三男夫婦の事業をサポートしている。近くにアパートを借り、孫娘の世話をしながら、午前中はスポーツクラブで汗を流し、友だちになった沖繩の人々との交流を楽しんでいる。皆さんは沖繩戦の生き残りだ。つらい体験をしてこられた人々である。

私の好きな言葉に「ナンクルナイサ（何でもないさ）」と「ヌチドウタカラ（命こそ宝）」がある。どんな苦労にも平気で耐え抜き、生を全うすることを孫たちにも教えたい。そう、戦いはスポーツの世界だけでいい。

